様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７２００１２

研究課題名（和文）新しい知識像のために――生のロゴスとしてのフロネーシス

研究課題名（英文）A New Picture of Human Knowledge: Phronesis as Logos of Life

研究代表者
荒畑　靖宏（ARAHATA, Yasuhiro）

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：５０５１６６１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,900,000円、（間接経費）　870,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アリストテレスがすぐれて人間的な知のあり方として観想的‐理論的なエピステーメーと区別した実践的知識（フロネーシス）を、人間の全ての知のモデルとして再考することで、行為論・認識論・言語哲学において新たな思考パラダイムを提供することを目指して出発した。しかし、その過程で明らかになったことは、この哲学的研究自体が、そしてまたそれを述べるための言語も、そのモデルから自由ではありえないということであった。こうして、哲学的言語といえども、「われわれのやっていること」を、超越的な視点から記述することはできず、したがって、哲学的言説は通常の言説と同じようになにかを語るのではないことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This research program aimed at providing a new paradigm for the philosophical theory of action, epistemology and the philosophy of language by way of reconsidering the practical knowledge ("phronesis"), which Aristotle distinguished from the discursive-theoretical knowledge ("episteme" in a narrow sense) and characterized as a distinctively human sort of knowledge. The research has made it clear that this philosophical investigation itself, and the language too in which it is to be stated, cannot be free from the model of phronesis. It follows that even the philosophical language cannot describe what we are doing from a transcendent standpoint and that it does not talk something in the same way as our ordinary language does.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：ハイデガー　ウィトゲンシュタイン　フレーゲ　語りと示し　形式的告示　フロネーシス　規則順守論　判断力

１．研究開始当初の背景

従来の哲学史では、デカルトの『方法叙説』に始まりカントの『純粋理性批判』をひとつの頂点とし、前世紀のフッサールの現象学へと繋がるとされる、認識論中心主義的な近現代哲学史が主流を占め、それに対立する動向として前世紀初頭に誕生した分析哲学が、言語そのものを研究対象とすることで認識論的問題設定とは全く異なる境地を切り開き新たな歴史をつくった、というように整理されることが多い。またその際、生の哲学や実存哲学、解釈学などといった動向はあくまで傍流の、「裏街道」のようなものとして位置づけられるのが通例であった。本研究は、むしろアリストテレスが「フロネーシス」ということで考えていた知のあり方をモデルとして哲学的問題に取り組んだ哲学者たちをとりあげ、ソクラテス・プラトン由来の「ソフィアの伝統」と対置され、「傍流」の生の哲学・実存主義・解釈学の伝統をも取り込み、現象学や分析哲学の登場によっても分断されない「フロネーシスの伝統」という新しい通史を明らかにすることを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は、理論的‐観想的な知（古代ギリシア哲学の世界において狭義で「エピステーメー」と呼ばれていたタイプの知）を理想的な知とみなしたプラトンの一元論的な知識観に抗して、アリストテレスが「すぐれて人間的な知のあり方」としてヌース〔知性による直知〕やソフィア〔真の智慧〕から区別した倫理的実践知（「フロネーシス」）に着目し、アリストテレスがこの概念に与えた倫理的な限定を取り払い、それをむしろ人間的な知一般のモデルとして考えることで、倫理学のみならず行為論・認識論・言語哲学においてどのような新しい展望が開けてくるのかを明らかにすることにあった。

３．研究の方法

上記 1「研究開始当初の背景」で言及された「フロネーシスの伝統」に属すると目される哲学者達の関連著作を検討し、その知識観を（それと明らかに対立する知識観がある場合にはそれと対比させることによって）取り出し、ときには相補的なものとして扱い、また対立し合う場合には弁証法的な綜合を目指すか、取捨選択をおこなうことで、人間的な知一般について極力統一的な描像を得ることに努める。具体的に取り上げられる哲学者は、プラトンに対するものとしてのアリストテレス、『判断力批判』におけるカント、『存在と時間』までの初期ハイデガー、後期ウィトゲンシュタイン、ガダマー、アンスコム（道徳哲学ならびに行為論）、マクダウェル（心の哲学と徳倫理学）などである。

４．研究成果

まず初年度（平成 22 年度）はアリストテレス研究から出発した。具体的には、1) 『プロトレプティコス』、2)『デ・アニマ』、3)『ニコマコス倫理学』を、専門二次文献ならびに当該巻についてのハイデガー解釈などを参照しつつ精読した。それによって本研究全体にとって不可欠の部分的成果として明らかとなったのは、a)『プロトレプティコス』におけるアリストテレスの議論は、フロネーシスという知のあり方をめぐってイソクラテス的弁証術とプラトンのイデア論を調停しようとする試みとして読めるということ、b)『デ・アニマ』におけるアリストテレスのいわゆる「心の哲学」を、ハイデガーがどのように自らの「現存在（Dasein）」という概念のうちに取り込んでいるか、c)『ニコマコス倫理学』第六巻における「魂が真理に到達する六つの仕方」についての議論が、ハイデガーの「世界内存在」という概念に決定的な影響を与えているということ、などである。

翌平成 23 年度の前半は、前年度のアリストテレス研究ならびに初期ハイデガーのアリストテレス受容の研究を受けて、ハイデガーのフロネーシス概念の受容について本格的に研究をおこなった。ところがその過程で、アリストテレスの理解するかぎりでのフロネーシス的知の「形式性」（内容の無規定性）や「前提性」（このタイプの知を習得するには、主体はその範囲も程度も定かではないある種の前提を満たしていることが必要とさ

れる）は、なによりも初期ハイデガーが一貫して自身の哲学の方法として彫琢しようとしていた「形式的告示（formale Anzeige）」の本質的諸特徴と符号することを発見した。そこで 23 年度の後半は、「形式的告示」についての定評ある研究文献を収集・精読することに費やされた。その結果、『世界観の心理学』におけるヤスパースの哲学的方法やキルケゴールの「間接的伝達」の方法などとの関連性を指摘する研究や、ハイデガーの解釈学的方法にとっての形式的告示の重要性を指摘する研究や、中・後期ハイデガーの「存在の思索」と形式的告示との密接な関連性を指摘する研究などはあるものの、当該概念をフロネーシス的知のいわばメタ哲学的発展とみなす研究は皆無であった。しかしながらこれらの研究はいずれも、形式的告示とは何であり、それはわれわれにとって何をするべきものとされているのかについて、非常に不明確な説明しか与えていない。平成 23 年度の研究の第一の成果は、この不明確さの原因は、形式的告示とは、ハイデガーがまさにフロネーシス的な知を哲学的方法として採用し発展させたものにほかならない、ということに先行研究が想到しなかったことにあるということの発見である。

翌平成 24 年度は、初期ハイデガーが自身の哲学的方法として採用していた「形式的告示」を明確化するべく、1919 年から 35 年までのハイデガーの講義録と「形式的告示」関連の二次文献の研究をおこなった。この作業には、ハイデガー哲学にとっての当該概念の意義を明らかにするというローカルな目的と、本研究全体の中心部分を構成するというグローバルな目的とがあった。前者について言えば、上でも述べたとおり、国内外を問わず先行研究はそのほとんどが、「形式的告示」という用語がハイデガーのどのような議論脈絡で使用されているかということの詳述に終始しており、それと彼の哲学観（メタ哲学）との本質的関連について十分に明らかにされているとは言いがたい。これに対して平成 24 年度の研究は、形式的告示とは、どのような存在者が、どのようなことをするときに、使わざるをえない方法であるとハイデガーが考えていたのか、という観点から研究を進めてきた。その成果を手短に述べるならば、形式的告示とは、何かを知ろうとし何かを理解しようとするときに、「投げられてあるところから始めざるをえない」存在者が、自身の生と自身の生きる世界を全体として把握するための唯一可能な方法である、ということである。そしてこの成果は、上述のグローバルな眼目にも同時に資するものであることが明らかとなった。なぜなら、人間の生とそこで典型的に営まされる知の営み（そのもっとも極端なかたちが哲学である）についての以上のような見方は、本研究が西洋哲学史の中から発掘することを目指していた「フロネーシスの伝統」の最大公約数を徹底化したものと考えることができるからである。それは、人間的知識がソフィア的なものではありえず、本質的にフロネーシス的であるということは、人間が自分たちの知の営みを全体として対象化して哲学をする場合にこそ明らかになるということである。

最後の平成 25 年度は、とくに前年の研究の成果として明らかとなった、フロネーシス的な知が哲学というかたちをとるときに採用せざるをえないハイデガー的な「形式的告示」という方法を、ウィトゲンシュタインの哲学が前・中・後期を通じて一貫して採用していた方法と類縁的なものとして読むという目標をあらたに掲げ、そのために果たすべき第一の課題として、従来、『哲学探究』を頂点とするウィトゲンシュタインの後期哲学とはまったく哲学的精神を異にすると思われてきた前期の『論理哲学論考』（以下『論考』と略記）を、フロネーシス的な知のモデルに基づいた哲学的方法を採用した書として読むことを目指した。だが、近年盛んに論じられている『論考』の哲学的方法を、定評ある研究論文を多数参照しつつ研究しているうちに明らかになったことは、『論考』の方法が G・フレーゲの「解明」という方法から大きな影響を受けているということであった。そこで平成 25 年度後半の研究は、フレーゲの「解明」を『論考』におけるウィトゲンシュタインの哲学的方法の先駆として読み解くことを目指して、フレーゲの全著作を綿密に研究した。それによって明らかになったことは、(1) フレーゲの数学の哲学における立場である「論理主義」は、彼の隠された形而上学的根本前提（これをヘーゲルの立場に倣って「汎論理主義」と呼ぶ）によって動機づけられているということ、(2) この汎

論理主義が、フレーゲに、彼の革新的な論理的表記法である概念記法の説明にあたって、「解明」という特異な方法をとらせたということ、(3) 従来は、「普遍主義」と呼ばれるフレーゲの論理学上の立場が彼に解明という特異な方法を採用させたと解釈されてきたが、むしろ、論理学における普遍主義と論理的表記法の説明における解明という方法は、フレーゲの汎論理主義によって必然的に要求されたものであるということ、(4) ところが、この汎論理主義こそが、フレーゲの（数学の哲学における）論理主義を破綻させる原因となったということである。この研究成果の意義は、この解釈によって、(1) 晩年になってフレーゲが論理主義を放棄した後でも、「個数言明は概念についての言明を含む」という考えを彼が保持し続けた理由が説明され、(2) メタ言語とそれによって与えられる対象言語（概念記法言語）の意味論というものをフレーゲに見いだせるかという近年の論争に見通しをつけることができたことである。後者について平成 25 年度の研究によって明らかとなったのは、メタ言語によって与えられる意味論という発想（これは基本的に反フロネーシス的な考えである）は、汎論理主義という形而上学的前提によって不可能であったし、そもそも不必要であったはずだ、というものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 荒畑靖宏「フレーゲの「形而上学」と「方法」—汎論理主義と解明—」『ヨーロッパ文化研究』(成城大学大学院文学研究科紀要：査読あり)、第 33 集、2014 年、pp. 29-120

② 荒畑靖宏「アスペクトの恒常性と脆さ——ウィトゲンシュタインとハイデガー」、『ヨーロッパ文化研究』（成城大学大学院文学研究科紀要：査読あり）、第 32 集、2013 年、pp. 35-97

③ 荒畑靖宏「現象と文法——ハイデガーとウィトゲンシュタイン」、『法学研究』（慶應義塾大学法学研究会編：査読なし）第 84 巻第 2 号、2011 年、pp.1-24

〔学会発表〕（計 1 件）

① 荒畑靖宏「アスペクトの脆さ——ウィトゲンシュタインとハイデガー」、日本大学文理学部人文科学研究所哲学第 2 回ワークショップ「ウィトゲンシュタインの哲学をめぐって」、於・日本大学、2012 年 10 月

〔図書〕（計 1 件）

① ハイデガー研究会編『科学と技術への問い——ハイデッガー研究会第三論集』、理想社 2012 年（第三部　荒畑靖宏「自己知・アスペクト・遮蔽 — ハイデッガーとウィトゲンシュタインにおける「霊性の構え」」（pp. 199-216））

６．研究組織

(1) 研究代表者

荒畑 靖宏（ARAHATA, Yasuhiro）
成城大学・文芸学部・准教授
研究者番号：50516614